

## 遺稿（再掲）

## 「従北」文在寅のための「嘘つきおばあさん」、 日本軍慰安婦李容洙

黄意元（メディア・ウォッチ代表）  
西岡 力・翻訳

本稿は韓国のネットメディア「メディア・ウォッチ」が2018年4月14日に掲載した、『従北』文在寅のための『嘘つきおばあさん』、日本軍慰安婦李容洙の抄訳だ。女性記者の名前で発表されたが、黄意元氏が書いたものだ。

原文は大変長文で、(1)から(3)まであったが、(1)の主要部分を西岡力が日本語に訳した。それを『正論』2020年8月号が掲載した。『正論』では「若き韓国人が書いた慰安婦証言の変転」というタイトルになった。なお、巻末の表は紙数の関係で『正論』には収録されていない。

ここで(1)から(3)の副題を紹介する。

- (1) 李容洙と挺対協によって結局、国際詐欺劇に転落する危険に直面している我が国の日本軍慰安婦問題
- (2) 日本軍将校のために靈魂結婚式まで行ってやった李容洙、年齢、結婚、職業まで全部が虚偽嫌疑
- (3) 民主統合党比例代表国会議員まで申請して「従北」文在寅、「従北」挺対協といっしょに反米活動に余念のない李容洙

(西岡力)

李容洙氏は朝鮮人出身日本軍慰安婦中でも十分に「シンボル」として通る人物だ（以下敬称略）。

日本軍慰安婦生存者は数十人余りだが、(韓国の)主流マスコミが取り上げるのは、主に「韓国挺身隊問題対策協議会」(以下「挺対協」)と共に行動する4、5人に限定されている。李はそのような中でも尹美香・挺対協常任代表のパートナーとして、最も活発に対外活動を繰り広げてきた「代表」格だ。

だが、李容洙が果たして韓国国民が一般的に理解している典型的な「日本軍慰安婦」であるかどうかに対して、事情をよく知るネチズンは、かなり以前から批判的疑問を提起してきていたのが実情だ。左翼的ネット百科事典である「ナムウィキ」ユーザーをはじめ、多数のオンライン論客の度重なる合理的な批判にもかかわらず、主流マスコミはこれまで十何年の間、李容洙の問題に対して、知らないふりすることだけに汲々としてきた。

何よりも李容洙は、日本軍慰安婦問題の核心である日本軍による強制連行と関連して、その証言が何回も変わった前歴がある。しかも、彼女がほかでもない「従北」団体である挺対協と共に各種の左翼イデオロギー的活動、政治活動を行い続けてきた問題も簡単に

見過すことはできない重大事だ。

メディアウォッチの取材結果、李容洙の年齢、結婚、職業など、基本的な事項、即ちその正体が疑わしいことも確認された。

## 日本軍慰安婦の証言は絶対に疑ってはならないのか？

1993年の李容洙本人の証言と1997年の「ハンギョレ新聞」記事によれば、彼女は1944年10月に日本軍慰安婦に募集され、1945年1月から台湾の新竹空軍基地の横にある慰安所で、終戦時まで日本軍慰安婦生活をした。おおよそ7から10ヶ月程度、慰安婦生活をしたわけだ。

初期の証言によれば、李容洙は一日5～6人の日本軍人を相手にしたという。神風特攻隊だったという「長谷川」という日本軍将校が彼女を助けて、二人でロマンチックな愛を分かち合ったという話も出てくる。

だが、李容洙は1990年代後半から自分は「1942年に14歳で日本軍慰安婦に連行され、台湾で3年間、日本軍慰安婦生活をした」というように、証言内容が動揺し始めた。また、後日には一日に相手にした日本軍の数字もまた、初めに話した5～6人ではなく、最小20人、最大70人に急増し始めた。

1993年度に李容洙を扱った「ハンギョレ新聞」記事を見れば、解放後、飲み屋の従業員、家政婦などをして、日本軍慰安婦問題が浮上する前の1987年に、60歳で75歳の老人の後妻に入ったという話も出てくる。婚姻届まで出したという。

しかし、2007年のEBS（教育放送）の「時代の肖像」番組での証言では、日本軍慰安婦問題が浮上するまで、結婚もせず生きてきたという話をしている。

信じられないだろうが、こういう矛盾する証言は全部、李容洙本人「ひとり」の口から出たものなのだ。書かれた証言でも矛盾が、確認されている。

## 1993年には就職詐欺で日本軍慰安婦になったと証言

まず李容洙の1993年の証言から調べよう。引用する内容は、挺対協・挺身隊研究会編『強制によって連行された朝鮮人軍隊慰安婦たち 証言集1』（ハンウル）[日本語版は『証言-強制連行されたに朝鮮人軍隊慰安婦たち』明石書店、訳文では語尾を丁寧形に変え、また改行箇所も原文通りでないが、同書の他の部分に比較すると李容洙証言の訳文は原文に相対的に忠実なので、日本の読者の便宜のため日本語版から引用する。また、「連行された」とここで訳した原文動詞は、直訳すると「引きずって行かれた・西岡補以下同」だが、日本語としてなじまないの以下、すべてで「連行」と訳した]に収録されている。この内容はまた、今は理由不明で消されてしまった、女性家族部のウェブサイトにも収録されたもので、インターネットでは今でもその内容が簡単に検索可能だ。

〈一九四四年、私が満十六歳の秋のことです。〉

その頃、私の父は倉に米をかついで運ぶ雑役夫の仕事をしていました。私とおない年の友達の中に金プンスンという子がいましたが、その子の母親は飲み屋をしていました。

ある日私とその子の家に遊びに行くと、おばさんが「お前は履物ひとつ満足に履けなくてなんというさまだ。いいかい、お前もうちのプンスンと一緒にあのなんとかというところに行くといいよ。そこに行けばなんでもあるらしいから。ご飯もおなか一杯食べられるし、お前の家族の面倒もみてくれるって話だよ」と言いました。

当時、私の着ていたものといったらみすぼらしくて話にもなりません。それから幾日かたったある日、プンスンと川辺で貝をとっていたら、向こうの土手の上に見たことのない老人と日本人の男の人が立っているのが見えました。老人が私たちの方を指さすと、男の人は私たちの方へ降りて来ました。老人はすぐ何処かに行ってしまう、男の人が私たちに手真似で行こうという仕種をしました。私は怖くなりましたが、プンスンは知らんぷりして反対の方に逃げました。

それから何日かたったある日の明け方、プンスンが私の家の窓をたたきながら「そうっと出ておいで」と小声で言いました。私は足音をしのばせてそろそろとプンスンが言う通りに出て行きました。母にも何も言わないで、そのままプンスンの後について行きました。私はその時家で着ていた黒いトンチマ〔丈の短い筒形のスカート〕にボタンのついた長い綿のチョッサム〔単衣の上衣〕を着て下駄をつっかけていました。行ってみると川のほとりで見かけた日本人の男の人が立っていました。その男の人は四十歳ちょっと前ぐらいに見えました。国民服に戦闘帽をかぶっていました。その人は私に服の包みを渡ししながら、中にワンピースと革靴が入っているとしました。包みをそうっと開けてみると、ほんとうに赤いワンピースと革靴が入っていました。それをもらって、幼心にどんなに嬉しかったかわかりません。もう他のことは考えもしないで即座について行くことにしました。私を入れて娘たちが全部で五人いました。

そのまま駅に行って汽車に乗り、慶州で一軒の旅館に入りました。旅館の前の谷川で手を洗っていたら、山の斜面にうす紫色の花が一輪咲いていました。生まれて初めて見る花なので、なんという花なのか尋ねたら、トラヂ（桔梗）だと教えてくれました。そこで二晩ほど泊まっている間に、また女の子を二人連れてきました。みんなで娘たちが七人になりました。

慶州から汽車に乗って大邱を通りました。走る汽車の割れたガラス窓の向うに、私の家が見えました。その時になって初めて家のことが頭に浮かび、母に会いたくなりました。私は「オンマ（お母さん）の所に帰る」と泣きじゃくりました。服の包みを押し返して、「これはいらないから家に帰してほしい」と泣き続けました。泣き疲れて、しまいにはどうとう眠ってしまったので、どれくらい汽車に乗っていたのかわかりません。何日も過ぎたようです。（傍線引用者、以下同）

これが果たして日本軍による強制連行なのか。この証言だけでは友達プンスンの誘惑に加えて、本人の自発性もある家出行為である上、水商売をしていたプンスンのお母さんがプンスンと李容洙を人身売買の対象としたとしか見られない。関連業者による誘引詐欺の疑惑もある。

特に李容洙のこの1993年証言は、非常に具体的であることに注目しておく必要がある。自分の服装が「黒いトンチマ〔丈の短い筒形のスカート〕」に「ボタンのついた長い綿のチョッサム〔単衣の上衣〕」だったという部分、そして自分を連れていった日本人の男が

「四十歳ちょっと前ぐらいに」見えたという部分、その日本人の男が「国民服」に「戦闘帽」を着用していたという部分、そして自分を誘引するために「ワンピース」と「革靴」を与えたという部分まで、とても具体的だ。

これは李容洙が最も若い時期の公式証言でもあり、誰か見てもこの証言が最も信憑性があるといえよう。

李容洙はこのように業者によって誘引されて、台湾の日本空軍基地で慰安婦生活を始めることになる。「ハンギョレ新聞」1997年9月6日付記事「慰安婦おばあさん泣かないでください 台湾の新竹空軍基地の前 恥辱の現場を訪れたおばあさんの涙、慟哭」記事を見よう。

〈8月30日明け方5時30分、台湾の台北から1時間余り離れた新竹空軍基地の前。李容洙(72・大邱市達西区上仁洞鳩アパート107棟113号)おばあさんは、胸をなで下ろして座り込んでしまった。「まさかと思ったが…、ここが本当に」

「新竹」という大まかな記憶一つだけを手がかりに訪ねて来た、身を震わせる50余年前の慰安婦生活は、空軍基地と基地の横を流れる小川、部隊周辺の防空壕、戦争の時に20人余りの女性たちがいたという基地周辺の70代老人の証言によって、生き生きとよみがえった。「部隊の内側のようだ。最初はちゃんとした建物だったが、爆撃で壊されて板で仮設の建物を立てたのだった」

第2次大戦が終結に向かった1945年1月、ここに連れられてきた李容洙おばあさんは、ここがどこなのかさえ分からないまま、日本敗戦の日まで一日5から6人の日本軍人を相手にしなければならなかった。〉

慰安婦生活をした期間を見ると、1944年秋に「国民服」と「戦闘帽」を着用したある日本人男性と会って、その後日本の敗戦まで合計10ヵ月間、日本軍慰安婦生活をしたというのだ。この合計期間を覚えておきたい。

## 1990年代後半から動揺する李容洙の募集関連証言

だが、李容洙の上記のような証言内容は、偶然にも左派政権への政権交替がなされた1998年から明確に変わり始める。まず「ハンギョレ新聞」1998年5月6日付「慰安婦おばあさん政府支援金拒否、李容洙さんなど3人」記事を見よう。

〈日本軍慰安婦に連行されて帰ってきた大邱地域のおばあさん5人の中で、李容洙(71・大邱市)おばあさんなど3人が、日本に賠償を要求しないという政府方針に反発して、政府支援金3150万ウォンの受領を拒否した。慰安婦おばあさんが政府支援金の受領を拒否するのは、今回が初めてだ。

李容洙おばあさんらは4日、政府支援金受領と関連して「今後日本の民間基金を受け取らない」という覚書をもらいに来た大邱市関係者に会って、「日本政府に責任があるのだから彼らから正式の謝罪を受け、賠償をしてもらわなければならない」として、覚書を書くことと支援金の受領を拒否した。14歳だった1942年、日本軍慰安婦に連行された李容

洙おばあさんは92年、被害者らと共に10回余りも日本に渡り、日本政府の謝罪および法的賠償を要求してきた。>

1993年にははっきりと「1944年に16歳で」としていた内容が、1998年からは突然「1942年に14歳で」という内容に変わる。この部分は絶対に記者が恣意的に変えることができる内容ではない。

「ハンギョレ新聞」の1999年3月6日付「軍慰安婦おばあさん、大学院生になる」記事も見てみよう。満14歳と表記したが、やはり1942年が日本軍慰安婦に連行された年だ。

〈日帝当時、初等学校を中退し夜学で学問などを学んだ彼女は42年、満14歳の花のような年に日本軍慰安婦として連行され、解放の翌年である46年に故国に帰ってきた。〉

次は日本共産党次機関紙である「しんぶん赤旗」2002年6月26日付の「元「慰安婦」へ補償を、参議院議長らに法案成立要請」記事の内容だ。

〈同法案は、元「慰安婦」とされた人たちに謝罪の意を表し、その名誉回復のために必要な措置（金銭の支給を含む）を講ずると定めています。日本共産党、民主党、社民党の野党三党が前国会に提出し、継続審議になっています。

韓国の李容洙さん（74）は、十四歳で銃剣をつき付けられて連れてこられたこと、拒むと殴られ、電気による拷問を受けて死にかけたことなどを話し、「私は歴史の生き証人として今、生きている。この法案が審議され、成立することを望む」と語りました。

日本共産党からは吉川春子、八田ひろ子参院議員が同席しました。>

14歳という部分に加えて、銃剣で脅されて「連行」されたという内容まで出てくる。銃剣をつき付けた主体が誰なのかは出てこない。

## 1944年から3年間日本軍慰安婦生活をした？

次は、2004年12月4日にあった京都実行委員会主催「12・4 全国同時証言集会『消せない記憶』—日本軍『慰安婦』被害女性を招いて」の李容洙証言をもとに作られた、プロフィールの内容だ。

〈1928年韓国の大邱（テグ）生まれ。1944年、16歳の時に「軍服みたいな服を着た男」に連行され、台湾へ。移動中の船の中で、日本の兵隊たちに繰り返し強かんされる。

その後、連れて行かれた先の台湾で、日本軍「慰安婦」としての生活を3年間強制された。「慰安所」では1日に何人もの兵士の相手をさせられ、抵抗すると電線のようなもので電流を流されたり、丸太で叩かれたりなどの暴行を受けた。「解放」（日本の敗戦）後、しばらくしてから韓国に戻る。>

3年間日本軍慰安婦生活をしたという部分に注目してほしい。日本軍は周知のとおり

1945年に敗戦して台湾から退いた。それなのに1944年に日本軍慰安婦になったと話しており、どうして同時に3年の間日本軍慰安婦生活をしたと言えるのか。一つの証言のなかにも明白な矛盾が存在する。

次は2006年7月6日付「東亜日報」とのインタビュー内容だ。ここでは、家で寝ているときに日本軍によって連行されていったという。（『政府、日本に外交的努力していない』慰安婦おばあさん109人憲法訴訟）

〈「15歳だった1942年頃に家で寝ていて日本軍によって台湾に連行された。それ以後、私のからだは人生は満身瘡痍になった。ところが政府は何もしていない。私たちは韓国のお母さんでも、娘でもないということなのか」

5日午前ソウル鍾路区斎洞の憲法裁判所へ憲法訴訟審判請求書の提出に来た、日本軍慰安婦出身李容洙（79）おばあさんは、このように泣き叫んだ。〉

日本軍慰安婦に連行された経緯だけが変わったのではない。その時期が「1942年15歳だった」として、日本軍慰安婦になった経緯と年齢が全部変わった。

## 14歳か、15歳か、16歳か 1942年か、1943年か、1944年か

2007年2月15日、米国議会での証言報道を見よう。（「聯合ニュース」「慰安婦おばあさん」米議会証言録」2007年2月16日）

〈李容洙おばあさん「殴打と拷問、強姦で綴られた3年」

最初の証人として登場した李おばあさんは、「私は歴史の生き証人」という言葉から始めた。悲しみが込み上げるかのように「私が体験したことを必ず話すべきだが、とても恥ずかしい」としてすぐ目がしらを濡らした。そして日帝が犯した蛮行を一つ一つ告発した。性奴隷として過ごした恨み多い年月も打ち明けた。

1928年大邱で生まれた李おばあさんは、乳母として仕事をするお母さんの代わりに弟を世話して、綿糸工場に通って16歳だった1944年に軍慰安婦として台湾に連行された〉

元々は綿糸工場に通っていたという話が出てくる。ところで、ここでは「連行された」という表現は出てくるが、強制連行なのか人身売買なのか就職詐欺なのか、また、動員主体が日本軍なのか慰安所業者なのか不明だ。とにかく日本軍によると証言していないことは明らかだ。はっきりそのような証言をしたのであれば、韓国人記者がそれを書かないことはあり得ないからだ。

注目したい部分は、該当記事の小見出しが、〈李容洙おばあさん「殴打と拷問、強姦で綴られた3年」〉とつけられていることだ。李容洙のアメリカ議会証言に関する中央日報2007年2月17日記事とクロスチェックをしてみたところ、李容洙の当時ワーディングは「1944年16才の時、台湾に慰安婦として連行され、3年間日本軍の性のおもちゃになった」と確認される。

繰り返し指摘するが、1944年からどのようにして3年間、日本軍慰安婦になることが可

能なのか。2004年の京都実行委員会証言に続き、やはり一つの証言でも明白な矛盾が出てきてしまったのだ。

李容洙は、2015年4月に日本の安倍総理が米国の上下院合同会議で演説をしたとき、それを批判するために米国ワシントンに行った。李容洙はその時、世界的な言論機関である「ワシントン・ポスト」とインタビューをした。その2015年4月22日に掲載された「70 years later, a Korean ‘comfort woman’ demands apology from Japan」記事を見よう。

“At first the other girls tried to protect me because I was so young. I saw the soldiers on them, but the girls put a blanket over me and told me to pretend I was dead so nothing would happen to me. I didn’t know what they meant. I was only 14. I didn’t know anything then.“

As Lee recounted Tuesday during an interview at the home of friends in Fairfax, her nightmare began one night in October 1943. Lee said she was asleep in her family’s farmhouse when she heard a neighbor calling and went outside. Soon she found herself with four other girls being marched off by Japanese soldiers, then forced on a series of journeys by train, truck and ship.

When Lee was finally rescued and sent home after the war, she was 17. But in many ways, her life did not begin again until the plight of the comfort women became known.>

14歳で連行されたという。「1943年10月」だ。1943年10月から1945年8月までなら、日本軍慰安婦生活期間は2年になる。ところが自宅に帰ったとき17歳という。計算が合わない。

日本軍人らによって汽車、トラック、船で連行されたという。1993年の証言でも汽車に乗って慶州と大邱に行ったことが出てくるが、そこでは日本軍人に対する内容は一切なかった。

## 李容洙、へたをすれば偽証罪で刑事処罰を受けうる状況

李容洙のこのような動揺する証言は結局、本人の法的な身分さえ危険に陥れる状況だ。李容洙は2016年12月20日、『帝国の慰安婦』を著述した朴裕河・世宗（セジョン）大教授に対する1審の求刑の際に、法廷で次の通り証言した（「ハンギョレ新聞」2016年12月20日）。

〈16歳で寝ているとき軍人に捕まったが、軍人の部屋に入らないからと電気拷問など色々な苦痛にあわされた。台湾の神風部隊に連行されて、1946年に出てきた。朴裕河が妄言の本を出した。あんな教授がどのように学生を教えるか。厳罰してほしい。あまりにもくやしい。〉

1946年に出てきたという部分は、台湾から韓国に戻ったということと思われる。とにかく李容洙は、家で寝ているときに軍人に捕まった、と証言している。

李容洙のこの証言は一般的な証言ではなく、名誉毀損関連被害者としての刑事被告人を告発する法廷証言だ。その法廷証言が虚偽なら、偽証罪の処罰対象になりうる。法廷での虚偽証言を挺対協がそそのかしたとすれば、挺対協ももちろん教唆犯になりうる。

2018年3月10日、フランス議会での李容洙証言を見よう。日本軍が女の子を利用して自分を暴行拉致したという。年齢は再び15才に変わる（「東亜日報」2018年3月10日）。

〈ある日、部屋の中にいたら女の子が窓の外から手ぶりで私を呼びました。友だちが遊ぼうと誘っていると思って出て行ったら、その女の子が手で私の口をふさいで、軍人が鋭いもので背中を刺しました。そんなふうにして駅に連行されたのです。15歳のときでした。〉

アメリカ議会証言では、その重要な「日本軍」には言及もしなかったが、11年が過ぎてフランス議会証言では「日本軍」が、しかも暴行拉致をしたと話した。今後、アメリカかフランスのどちらかの議会関係者がこの違いを追及したならば、どうなるか。

## 国際詐欺に転落する危険に直面した韓国の日本軍慰安婦問題

結局、李容洙は何の検証も受けなくて25年間、このような形の日本軍慰安婦証言をしてきた。

李容洙の証言には、しばしば出てくる話、強制連行もあり、あまり出てこない話、就職詐欺もある。問題は二つの話が、特に日本政府の責任を問おうとする場合、本質が全く違うものとして扱われなければならないということだ。

それでも李容洙が今までしてきた証言の中で、相対的にしばしば出てきた話が、より真実に近いと言えないのか。そうかも知れない。だが、そうならば李容洙が今後10年間に行う証言で、ひょっとして全く違う新しい話が出てきて、その新しい話がよりしばしば語られれば、その新しい話が真実になり得るということになってしまわないか。

李容洙の動揺する証言変化問題、いや正確には虚偽証言問題と関連して、年を取った老人の記憶は行ったり来たりすることもあるではないか、また、虐待などによるトラウマを勘案せざるをえないのではないか、などと感傷的に考えては困る。

譲歩してもならない問題だが、百歩譲歩して時期、年齢がこんがらかることはありうるでしょう。だが、慰安婦になった具体的な経緯に関する陳述が、あれほど行ったり来たりするという事は、第三者が見た場合、記憶力だけの問題と捉えることは到底ありえない。そもそも記憶力に問題がある人の証言を聞くということ自体から、まじめに問題に対応する姿勢を見いだせない。

今、日本軍慰安婦問題において、日本軍による朝鮮少女強制連行が真実なのかどうかは、国際社会が多大な関心を持っている問題の核心だ。しかも李容洙は挺対協によって、この間、マスコミや政府から日本軍慰安婦の「代表」のような待遇を受けてきた。

国際社会が礼儀上、適当にやり過ごしてくれるのも一日二日だ。李容洙の場合、2007年アメリカ議会証言と2018年フランス議員証言からして異なっているではないか。日本は置いておくにしても、たとえばアメリカ議会、フランス議会から何かちょっと変なのではないかというような形で、再証言要求が来たでしょう。国際社会に公開した最高に公的

な証言の問題なのに、人間が生きていくなかではそのようなこともあるのではないかと、という弁解が果たして受け入れられようか。

今、李容洙に再び慰安婦になった具体的な経緯、時期を尋ねるとしても、国際社会も、国内外の言論も、挺対協も、もしかしたら李容洙本人さえ、どのような証言が出てくるのかは誰も予測することができない。

日本軍による朝鮮人少女強制連行は、数十年余りの調査にもかかわらず、客観的物証が出てこなかった問題だ。日本軍慰安婦の証言を除いては、家族や隣人の「第三者証言」（もちろん学界が広く認め信じるに足るもの）さえ、ただ一件も出てこなかったのだ。

このような状況で、それなりの唯一の証拠である「日本軍慰安婦代表」の「強制連行核心証言」が、このように数えきれない程に揺れてきたことが海外にも知られる場合、今後国際社会で日本軍慰安婦問題はどのような取り扱いを受けることになるだろうか。何より国際社会で我が国の国の品格はどうなるだろうか。

遅くなってはしまったが、誰かがこの危機状況を警告して、はやく出口戦略を作ろうと言わねばならないのではないかと。

表・李容洙、日本軍慰安婦になった経緯証言の変遷史

番号	証言時期	慰安婦になった経緯	慰安婦になった時期	年齢	慰安婦にした主体	慰安婦として働いた期間	出所
1	1993	家出、人身売買、就業詐欺	1944年秋	満16歳	軍服のような服を着た日本人男	10 ヶ月	挺対協編「証言集1」
2	1997	連行？	1944年？				「ハンギョレ新聞」1997.9.6
3	1998.5		1942年	14歳		3年	同1998.5.6
4	1999.3		1942年	満14歳		3年	同1999.3.6
5	2002.6	銃剣脅迫？		14歳			日本共産党「しんぶん赤旗」2002.6.26
6	2004.12	連行？	1944年	16歳	軍服のような服を着た日本人男	3年	日本京都慰安婦証言集会・ホームページのプロフィール
7	2006.7	強制連行	1942年	15歳	日本軍	3年	憲法裁判所提訴記者会見・「東亜日報」2006.7.6
8	2007.2	連行？	1944年	16歳	？	3年	米議会証言・「聯合ニュース」2007.2.16
9	2007.6	強制連行	1944年10月		日本軍	10 ヶ月	韓国EBS「時代の肖像」・「オーマイニュース」2007.6.9
10	2009.3	強制連行		15歳	日本軍		「私は日本軍慰安婦だった」(新日本出版社)・「iRONNA」2017.11.29竹嶋渉記事から再引用

11	2012.9	強制連行		17歳	日本軍	2年	「嶺南日報」2012.9.14
12	2014.7	強制連行		15歳	日本軍		漢陽大証言・「ニューシス」2014.7.4
13	2014	就業詐欺		16歳	日本人男		「アジア経済」ネット企画記事「慰安婦報告書55」
14	2015.3	強制連行	1943年夏	16歳	日本軍	2年	人文学の会「トゥ・モク会」証言・「オーマイニュース」2015.3.15
15	2015.4	強制連行	1943年10月	14歳	日本軍	2年	「ワシントン・ポスト」2015.4.22
16	2015.4	強制連行？		15歳	日本政府？		ウェブマガジン「ニュースロ」インタビュー・「ニューシス」2015.4.23
17	2015.6	強制連行	1943年秋	16歳	日本軍	2年	「未来韓国」2015.6.24
18	2016.12	強制連行		16歳	日本軍		法廷証言・「ハンギョレ新聞」2016.12.20
19	2017.1	就業詐欺？					法廷の外での会見・「聯合ニュース」2017.1.25
20	2018.3	強制連行		15歳	日本軍		フランス議会証言・「東亜日報」2018.3.10